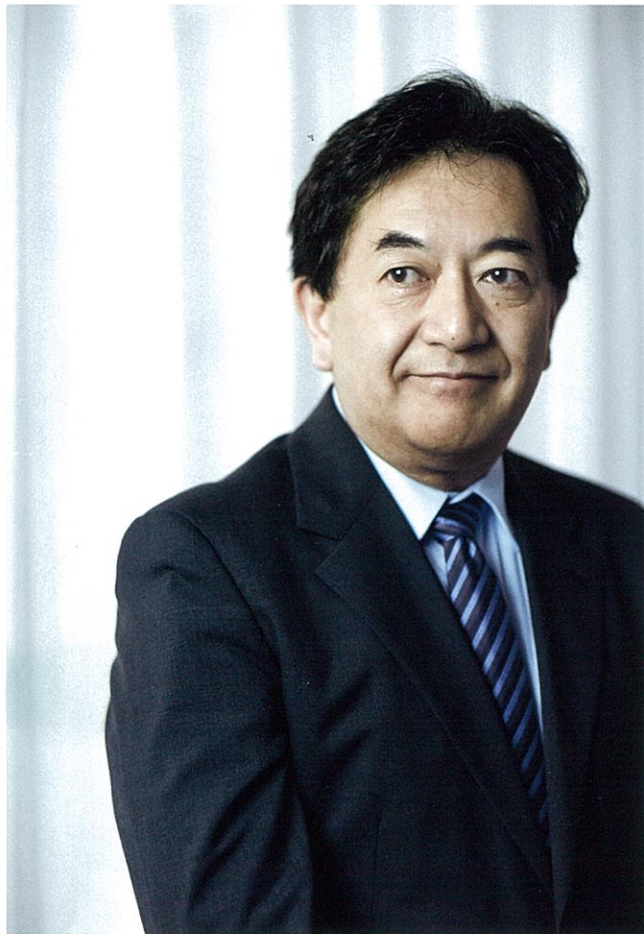


田中康夫

「地に足がついていない、
と当時は評された彼女たちの
その後を描きました」



『33年後のなんとなく、クリスタル』

田中康夫 (河出書房新社)

あの頃、大学に通いながらモデルをしていた由利、テニス同好会で由利と一緒にだった早苗、神宮前の学生会館で暮らしていた江美子たちは、いまどんな時を過ごしているのか。デビュー作『なんとなく、クリスタル』に登場した彼女たちのいまを、再び描く。1600円

33年前、主人公の由利は女子大生だった。青山の大学に通う由利の世代を書いた『なんとなく、クリスタル』は、発売直後から大きな反響を呼び、ミリオン・セラーを記録した。由利は作品の中で、こんな言葉を残す。

（あと十年たったら、私はどうなっているんだろう）

大学に通うかたわら続けていたモデルの仕事も順調で、淳一という彼もいた由利には当時、悩みなんで何もなかった。

だが、（なんとなく気分がよいものを、買ったり、着たり、食べたりする。そして、なんとなく気分がよい音楽を聴いて、なんとなく気分がよいところへ散歩しに行ったり、遊びに行ったりする。暮らしぶりを、地に足がついていないと非難する人たちも多く出現した。あの頃、輝いていた彼女たちは、いまどうしているのだろう。

田中さんは、再び由利が登場する小説を書いた。タイトルは『33年後のなんとなく、クリスタル』。語り手は、なんくり

には登場しなかったヤスオだ。物語は、愛犬ロクと散歩中のヤスオが、由利の友達だった江美子とばったり再会するシーンから始まる。すぐに、江美子や由利とface bookで友達となり連絡を取り合うようになったヤスオは、かつての登場人物や江美子のママ友が集う女子会に招待された。眺めのいいリビングでランチを楽しむながら、語り合う女性たち。話題に上るのは、ナチュラルなライフスタイルへの憧れや日本の人口減への不安、お年寄りや小さな子ども連れに優しい社会のこと。どれも身近で切実な問題だ。

「JJガールと呼ばれた彼女たちは消費社会の中で無自覚に生きてきたかのように言われがち。でも実は彼女たちの方が、数値に換算できないものなど価値ゼロと捉える市場の感覚を大切にしたいと考えているのでは。ひとり暮らしのお年寄りに、この切り身、小さいから20円まけとよくとひと声かけるようなやり取り。そうした体温が感じられる社会や家族との人間的関係、文化・伝統に価値を見出そうとしているのです」

卒業後、フランス系の化粧品会社で広報を担当していた由利は、十数年前に独立してPRオフィスを立ち上げる。

「重篤な副反応に苦しむ子どもが相次ぐ子宮頸がんワクチンの啓蒙啓発事業にも携わる由利は、戸惑いを感じています。すると子宮を全摘した元同級生の早苗に、子宮頸がん検診が充実している英米では8割もの女性が受けているのに、日本は2割台に留まっているのは何故、と尋ねられるのです。

科学的知見という言葉を通じて疑われない男性よりも、むしろ彼女たちの方が優れた『個性』の持ち主かも知れません」

かつて「ルイ・ヴィトンのバッグを買ってうれい」と、岩波新書をありがたがるのは

等価だ」と語って物議を醸した田中さんは、地に足がついていないと言われ続けた彼女たちの皮膚感覚を的確に描写する。

54歳からの新たな挑戦

ふたりきりの席で、由利はヤスオに「チエスの色を変えなくても言うのかな。そんな気持ちなの」と打ち明ける。彼女は54歳で南アフリカの人たちに眼鏡を届けるという社会貢献事業に取り組みむというのだ。恵まれているから出来るのだ、と皮肉る人もいるが……。

「食うや食わずで隣人愛を抱けるわけもないでしょ。超少子・超高齢社会に直面している私たちも、肩肘張らず、出来る時に出来ることを出来る人が出来る場で出来る限り」という気持ちの余裕が大切なのです」

〈黄昏時つて案外、好きよ。だって、夕焼けの名残の赤みって、どことなく夜明けの感じと似ているでしょ〉とつぶやく由利。明るい方向へと走り続けようとする姿は、とてもしなやかで美しい。

いまだに若い女性がお好きなのかな、と思っていた康夫さんが、私たち50代をこんなに素敵に書いてくれるなんて感激だ。

「だって、『微力だけど無力じゃない』と語り合う『HERS』世代の彼女たち、とてもイキキしてますもの」

小説の中のヤスオと同じ口調だった。

たなかやすお 1956年、東京都生まれ。64年から75年まで信州で過ごす。一橋大学在学中の1980年に『なんとなく、クリスタル』で文藝賞受賞。95年阪神・淡路大震災後、ボランティア活動に従事。00年、06年長野県知事を務める。07年、12年参議院議員、衆議院議員。小説に『プリリント』(午後)、『晋みたい』等。評論に『神戸震災日記』『愛国呆談』等。